

18_2 . 「舞踏会の手帖」と「源氏物語」(承前)

二、空蝉

源氏と空蝉との出会いは、まったく偶然であった。「雨夜の品定め」の女性談義に夜を明かした翌日、源氏は久しぶりに妻葵上の左大臣邸へ退出したが、たまたま方違えのため、急に家来筋にあたる中川の紀伊守邸で一夜を明かすことになる。其処ではからずも、守の父で現在任地にある伊予介の若い後妻空蝉と逢うはめになる。彼女は故衛門督の娘で、父は生前彼女を宮仕えに出し立てたい希望を持っており、源氏もそのよしを聞いた覚えがり、その上昨夜の品定めで「中の品」の女への興味を焚きつけられた余勢も手伝って、同宿の空蝉に対して関心をもつ。

かくて源氏は同行の供人の寝静まるのを待って空蝉の寝室へ忍び入る。「流るるまで汗になりて、いとなやましげなる」(帚木)女に対して源氏は例によって、どこから取り出されるのか分らぬような、身も心もとろけるような甘言で口説く。女の返事は

現^{うつ}とも覚えすこそ。かすならぬ身ながらも、思しくだしける御心ばへの程も、いかが浅くは思う給へざらむ(これほどまでも見下しなされた御心も、何で浅いと思わずにいられましようか)いとかやうなる際は、際とこそ侍るなれ(私のような賤しい者は、やはり身分相應の縁というものがございます)。(同前)

最後の言葉は「あなたの目から見てどんな賤しい身分でも、私は伊予介の妻でございます」という精一杯の抵抗であろう。今まで経験したこともない思いがけない抵抗にあって、著しく自尊心を傷つけられた源氏の心は、最初の一般的な好奇心からどうしても意に従わずにはおかぬ強い執着に変わる。その時の女の姿は次のように書かれる。

人がらのたをやぎたるに(しなやかであるのに)強き心をしひて加へたれば、なよ竹の心地して、さすがに折るべくもあらず。まことに心やましくて(空蝉はしんじつ辛くなって)あながちなる御心ばへを(無理強いな源氏の御心を)言ふ方なしと思ひて泣くさまなど、いとあはれなり。心苦しくはあれど、見ざらましかば(もし空蝉に逢わなかったら)口惜しからましと思す。(同前)

結局女は源氏の手から逃れる術なく承諾する。その時言った女の言葉は心のうちを語って哀れである。

いとかく憂き身の程の定まらぬ、ありしなごらの身にて(かように受領の妻などという不仕合わせな身分がまださだまらぬ昔ながらの身で)かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我頼^{われだのみ}にて(自分だけの勝手な期待で)見直し給ふ^{のちせ}後瀬をも思ひ給へ慰めましを(いつか

はいとしい者と見直して頂ける機会もあるうかと思慰めましようものを)いとかう仮なる浮寝の程を思ひ侍るに(かような仮初の契と思うにつけて)類^{たぐい}なく思ふ給へ惑はるるなり。よし、今は見きとなかけそ(ままよ、仕方がありません。逢ったとは決して言葉にもお出し下さいますな)。

最後の言葉は悲痛である。なお「見きとなかけそ」には本歌がある。

それをだに思ふこととてわが宿を見きと言ひそ人の聞かくに(古今恋五・読人しらず)(せめてあなたが私のことを思って下さるなら、そのしるしとして私の家へ通ったことを言わないで下さい)

本歌に比べれば、空蝉の言葉ははるかに哀切である。彼女は源氏と逢ったことを人に言下さるなと言っているのではない。あなたと逢うのは今夜一晩だけです。と自分自身に言い聞かせているのである。これは今後再び逢うことを断念する決意の表明にほかならない。にもかかわらず彼女の心の深いところでは、この決意と相反する気持が息づいていた。しかしそれは決して許さるべきことではなかった。げんに源氏と逢って別れる暁のことが次のように書かれている。

つねはいとすくずくしく、心づきなしと思ひあなづる(きちょうめんで気に食わぬと軽蔑している)伊予の方の思ひやられて、夢にや見ゆらむと、そら恐ろしくつつまし。

身の憂さをなげくにあかである夜はとり重ねてぞ音もなけれける(帚木)

昨夜のことが、ふだんは軽蔑している老受領の夫の夢にあらわれはしないかとそら恐しく思うとともに、一方では源氏との逢瀬を断念しなければならない我が身の不運をなげかずにはおれないのである。これらの「なげき」の裏に、遂げられない愛への渴望を見ることが出来る。

若い源氏には、そんな屈折した女の断念の決意など見えるはずはなく、女の強情に反撥して二度三度逢瀬を迫る。しかし彼女は、そのたびに身の不運に泣きながら断乎として拒否する。

とてもかくても、今はいふかひなき宿世なりければ、無^む心^{しん}に心づきなくて止みなむ、と思ひ果てたり(情知らずの嫌な女として押通そう)。(同前)

厳重な身分制の呪縛と人間性の自由との間にゆれ動きながら、彼女はただ一度の源氏との逢瀬に、彼女の青春のすべてを賭けた。たった一度の逢瀬のうちに、彼女は彼女の人生のすべてを経験した。生きることのなげきと、生きることのよろこびと同時に経験した。それにしてもなげきの如何に長く、よろこびの如何にはかないものであったか。

数ならぬふせ屋におふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木(同前)

うつせみ^は羽におく露^こ木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな(空蝉)

その後空蝉は、源氏の愛を心の奥で受容しながら、受領の妻であることの自制故に夫とともに都を去る。それから十年後彼女は「関屋」で源氏の車とすれ違う。その時の女の歌

行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ

え知り給はじかし、と思ふに、いとかひなし(関屋)

なお空蝉は古来作者の自画像であると言われてきた。(つづく)